

広島俳句倶楽部

令和四年十一月作品集

ピアノと私

亜矢

子供の頃に習っていたピアノを再開するきっかけとなったのは、息子が習い始めたことです。

芸術は、私にとって欠かせないものです。心のこもった音をだすことが苦手な私ですが、できるだけ長く続けたいと思っています。

秋晴や子を送り出しピアノ室

片手づつさらふ小節昼の月

秋ともし指番号を書き込みて

花木槿モーツアルトの和音かな

月の夜や手擦れの多き教則本

秋の星辞書で調ぶるイタリア語

玄関に小菊を生けてピアノ弾く

黒鍵をすべる指先うそ寒し

目をつむりピアノに向ふ秋日かな

冬近し楽譜に付きし開きぐせ

《作品鑑賞》

すみれ

この度の亜矢さんの作品は、「ピアノと私」というタイトルが新鮮で、弾む想いで読ませていただきました。私もピアノが大好きで、作品の一句一句に同感しました。

秋晴や子を送り出しピアノ室

朝の家事を終え、ほっとしてピアノに向かう。至福のひとつときを感じられます。

花木槿モーツアルトの和音かな

大好きなモーツアルトの曲。どうも思うような音色が出せない。ふと窓越しの木槿を見て、また弾き始めたのではないでしょうか。

黒鍵をすべる指先うそ寒し

黒鍵の奥ゆかしい、少し籠った音が何とも美しい。あっという間に時間が立ったのでしょうか。

よい作品に触れ、ピアノが弾きたくなりました。

冬の虹

暁子

小豆島から祖谷、大歩危に行ってきた。広島からあまり遠くない所ですが、私には初めての行程でした。初冬の天気は目まぐるしく変わり、少々難儀もしましたが、いろいろな風景を見ることができました。小豆島が思いのほか大きな島であること、吉野川の流れの清らかなこと、特に大歩危の谷の深さには心を動かされました。季節を変えて、また行きたいと思っています。

オリーブの島に懸かりて冬の虹

放哉も歩きし路地と花八つ手

大木に冬の日照雨の降りにけり

冬の月おぼろに懸かる屋島かな

低く飛ぶ鳥の来てる冬の浜

大歩危の時雨れてるたり川下り

冬紅葉先行く舟は淵に入り

冬の谷小石の落つる音しきり

寒禽の歩いてるたり滝下橋

時雨るるや札所の門に杖を置き

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

作者は、自宅や近くの山を歩いて自然を詠む句を多くつくられているが、今回は、四国への旅を詠まれた。言葉の豊かな、詩心のある俳人の作風を存分に味わえる特別作品となっている。

放哉も歩きし路地と花八つ手

尾崎放哉は、自由律俳句の俳人、「咳をしても一人」は、晩年小豆島の寺の庵に暮らした放哉の句である。放哉の生涯を思いながら、作者は小豆島を歩く。「花八つ手」の地味ながら存在感のある季語が生きる。

冬の月おぼろに懸かる屋島かな

屋島は山頂が屋根のように平らな形で、国の天然記念物に指定されている。その特徴ある島の上に冬の月がぼんやりと懸かっている。どこか異国のような風情を漂わせる句だ。

冬紅葉先行く舟は淵に入り

先を行く川下りの船が、流れのゆっくりとした淵に入っていく。美しく色を変えた紅葉を見るのだろう。作者の乗る船も、また同じように淵に寄っていくのだ。

昼寝覚古事記のつづき読んでをり

鶺鴒が鳴けば色付く桜かな

大あけび右と左で村分かれ

稲雀古墳の方へ飛び去りぬ

鬼ノ城をかくも離れて後の月

このたびは秋の社日の大路かな

秋の雨しづかに大路濡らしをり

秋の雨上がり鬼ノ城よく見ゆる

秋の蝶降りては飛べる大路かな

ひよどりの騒ぐ弥生の墳墓かな

通ひ路の桜紅葉となりにつけり

雨の手に買物袋日短か

沓立草揺るるファミレス跡地かな

短日や学習塾の灯の明し

作文の選考を終へ秋思かな

氣に入つた湯呑に茶淹れ夜長かな

供養塔離れて圓けり秋の水

冬の月次第に翳るさま眺む

月蝕を終へて静かな芒かな

綿虫を目で追うてまた見失ふ

暮れてゆく芙蓉を人の帰りけり

虫の音をときをり列車通り過ぐ

鶺鴒の声の近きに目覚めけり

鏈れ合ひ橋を越えたり秋の蝶

振り返り見ては帰りぬ後の月

近々とひよどりの居る梢かな

秋深しベンチにひとり足伸ばし

撞く鐘に公孫樹黄葉の暮れてゆく

枇杷の花朝の日差にはころびぬ

ひそやかに山茶花の散る川辺かな

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

空つばの檻を通りて秋の蝶

秋の蝶二頭三頭もつれけり

棕鳥の群廣島城の裏に去る

似顔絵はなるほど私教老日

家までの百歩を鳴けり残る虫

山からの風を歩いて今朝の冬

楳紅葉散り敷いてきり峠道

初鴨の水蹴つて飛ぶ城の濠

冬日背にゆつくり坂を上りけり

枇杷の花高きところに鳥鳴いて

あざみ

鳥籠に布かけてやる月夜かな

秋澄んで鳥の羽音の遠ざかる

秋草にからまり鳥の羽根揺るる

秋日傘石に立て掛け石に座す

キジ猫の近づいてゆく紅葉かな

我の居し石に鴉や草紅葉

秋深し日陰の枝に鴉居て

目の前に木の葉の落つる城の址

城濠の鯉を見てる秋日和

虫時雨小学校の高き塀

亜矢

化粧せぬ我やダリアの園に居て

ぐづる子の声や色なき風の中

吊し柿一連揺れて学生寮

山陰の土産に新酒買ひにけり

母淹れしココアを飲みて秋日和

緇の飛ぶ岸辺自転車飛ばしたり

新豆腐一斗缶より祖母の売る

吾のための絵画始むる文化の日

朝明けの飯の匂ひや冬に入る

呉湾を望みつつ行く石路咲いて

綾乃

秋の昼巨船が橋をくぐりたる

秋雲に追ひ越されゆくバスの旅

秋晴の高知の海の黒きかな

風止みてコスモスの向き定まりぬ

揚々と口を開けたる石榴かな

溜池に映り秋雲動かざる

棕鳥に電線重る日暮かな

行き暮れて金木犀の道に入る

坂上る神輿の声や秋の晴

ありし日の宇品線かな秋澄めり

木犀の香りに気づく曲り角

団栗を踏み割り歩く石畳

置露や朝一番のバイク過ぐ

秋惜しむ玄木に凭れかかりつ

終バスのライトの中に公孫樹散る

柿落葉一枝選りてより掃きぬ

小春日や足指見ゆるベビーカー

洛北や公孫樹落葉の古寺巡り

自転車に桜落葉の舞ひ上がる

煮崩れの蕪も残さず母の椀

藤袴はるばる蝶の来てをりぬ

秋うらら渡りの蝶の通る道

芒原阿蘇の大地を覆ひたる

すすき揺れ阿蘇に赤牛歩きをり

初紅葉日向の郷に滝の音

秋の薔薇半分残し摘み来たり

帰省せし息子と眺む秋の庭

白菜を姑美味く漬けてをり

紅葉散る庭に小雨の降りつく

山茶花の咲き始めたる垣根かな

井藤希

栄吉

大畑恵

広島の地図広げれば小鳥来る

また越ゆる県境の山粧ひて

園児らの手にそれぞれの色葉かな

谷沿はたちまち暮れて紅葉狩

オペラ観て紅葉明りを帰りけり

秋澄んで雁木を鳩の歩きをり

宮島の裏道に秋惜しみけり

隧道の入口出口紅葉散る

奥の院紅葉且つ散る石畳

冬の夜やジャッカルの日また読み返し

暁子

秋の水魚影の移る川の底

暗渠へと音させて入る秋の水

故郷の土産に柘榴二つ三つ

杖を立て爽籟の中人を待つ

紅葉せる蓆木並ぶ祖母の家

ラジオから昭和の歌の夜長かな

雨降つて止んでまた降る夜寒かな

一村を越えて行くだび秋深し

小春日や朝刊広げメモを取り

蒲団干す客人は皆わが子なり

すみれ

立ち止まり秋の虹見る人と人

渡し場にあまたの人や秋日濃し

そこだけに風の吹ききたる薄原

夕暮の雨の匂や草紅葉

菊の香に包まるる朝客を待ち

鴉飛ぶ影の速さや冬に入る

渡し舟行き交うてゐる小六月

落葉掃く人に落葉のまた降つて

鳥の影つぎつぎ過る落葉掻

風に揺れ鳥に揺れたる桔蓮

知佳子

母が家にぐるり見渡す秋の雲

手植した稲を見童の刈り取りぬ

シロに子を連れて歩くや葺山

子のあとに付いて歩ける葺山

名を知らぬ葺を家で調べたり

柿を吊る翁の座る椅子の前

吊し柿駄屋の二階に二十連

母が家の裏の畑に狸来る

裏山に初めて生えし滑子かな

夕焼の上に出でたり冬三日月

ちどり

秋夕日暫く海を照らしたり

入院の友の絵手紙秋の声

届きたる箱を開くれば林檎の香

夫が投げナイスボールと林檎受く

公孫樹黄葉の真つ只中を子の駆くる

草の名をスマホで覚え秋惜しむ

波一つ立てず滑りて鴨の群

金星を伴ひ出ずる冬の月

なかなか減らぬおでんや老い二人

焼薯を割つてはふはふ頬張りぬ

友岡葉山子

月明り頼りに参る社かな

手術の日秋の山から朝日出る

高台に色とりどりのコスモス見

鰯は跳ね鰯はゆるりと首伸ばす

月に照る海面じつと見てをりぬ

芒原抜けて着きたる山の宿

露天風呂空の高きに月を見て

細き道登つた先に柿の村

柿園の人に聞きたる美味の訳

枝先に触れて公孫樹の黄葉かな

雲雀

秋の声欄間の隙を流れゆく

初冬の館小部屋のデスマスク

初時雨戦国衣装の婿が来る

冬の庭子が駆け回るウエディング

冬の街屋台の客は女子ばかり

鹿の角まだ鉛筆の細さかな

神々し照景にスマホ低くする

どんぐりの降る音続く天狗の木

紅葉且つ散る色白の少女泣く

色鳥は松の木を葉をくるくると

ドア越しに大きな産声聞く秋夜

四阿に花嫁の居る菊日和

薄もみじ木橋土橋わたりけり

ばさばさと葉の落ちてくる松手入

木の実落つ祠の屋根を叩いては

草紅葉踏みしめながら屋根歩く

風向きのよく変はるなり芒原

農の家一軒づつに柿熟るる

一点の翳りなき空木守柿

山茶花の駅を快速通り過ぐ

一筋を壁に残して秋出水

農道に見上ぐる島の青蜜柑

何事もなき一日かな案山子立つ

満ち潮の波に抗ひ鰯の飛ぶ

袷線の道の両脇草紅葉

参拝を終へて貰ひぬ庫裏の柿

水洗ひ重ね干したる銀杏の実

時雨るるや駅のホームに蕎麦を食べ

犬同士吠え合うてる霜の朝

さざ波に揺らるるままや浮寝鳥

ふじ女

松田裕子

森口良樹

ジョギングの少年に会ふ秋夕焼

秋夕焼縄文人も見てゐしか

色揃ふ洗濯ばさみ鳥渡る

玻璃戸より見ゆる青空鳥渡る

鳥渡る恋人は手を繋ぎ合ひ

しばらくは菓耳付けて遊びをり

白萩の零るる道を歩きけり

しはがれた声の鴉や秋の暮

オリオン座流星群に秋惜しむ

初さんま脂の落ちて火の猛る

柿食うて喧嘩の理由忘れをり

流れ星と闇の中から声のして

真つ直ぐの道歩きけり素十の忌

あけぼのや指濡らしたる芋の露

一夜ごと耳澄ませたりすがれ虫

薄墨のはがき書きをり散紅葉

がんどきの細き筋踏む冬初め

餌を待つ鯉の沓や小六月

木犀の生垣つづく通学路

紫蘇の実のレシビを友と交換す

白湯を飲む窓に有明月懸かる

黄葉の流るる一葉舟のごと

アンテナの鵲を見上ぐる姉弟

玄関の隅々を掃き冬に入る

潮入をゆるゆる遡る鴨の群

ズボンには折山二本神の留守

鍬を打つ冬の畑の日溜りに

辻純江

村上理江

山野ウタ

秋天に向かひて長き橋渡る

オルガンが御堂に聞こえ秋晴るる

にぎやかに鳥の集まる秋日和

日の暮の並木紅葉をともに行く

黄落に乳母車より子を降ろす

さざん花の散つて汚せし舗道かな

セーターをかぶつて胸を張つてみる

力込め車椅子押す霜の朝

桑門わかこ

母と子の秋の夕日を眺めをり

秋風や自転車のギア一つ上げ

いつもより背筋を伸ばし秋の街

秋晴や待ちに待つたる合唱祭

出雲路の旅の終りの走り蕎麦

どんぐりの声に園児の駆け寄り来

振つてみるとタクト渡され小六月

お好み焼屋のおばちゃん遊ぶや石路の花

高梨英子

白球を投ぐる我が子や秋眩し

ゴロゴロと我起こす猫秋の朝

金木犀香れば思ふ里の庭

秋の午後草を刈る音けたたまし

草刈つて大き飛蝗の跳び出せる

月を見る傍らに猫来てゐたり

中野明美

青々と続く一畝冬菜畑

泥落とし束ね持たせる冬菜かな

蓮枯れて鐘撞く人のなかりけり

枯菊を手折れば香りかすかなり

鼻の奥つんと刺すごと霜の夜

タクシーの窓より眺む冬の雨

撫子

紅葉狩瀬戸の島々船渡り

間引菜をさつそく夕の膳に出す

はつ冬や信子の色くつきりと

散歩する靴先濡れて初霜か

冬の夜の響いてきたる花火音

冬晴の公園はしやぐ声高し

美耶

秋の夜の皆既月蝕ビルの上

色付きし葉を集めたり散歩道

菊花展一花一鉢見て歩き

坂道の柿は鈴生り夕日受け

下校児のランドセルにも公孫樹散る

金川昭子

足早に雑木紅葉を目指したり

銀杏の散らばりるたり獣道

墳丘に立ちて出雲の秋の風

街灯の照らす黄葉の美しき

客を待つベニマンサクの紅葉生け

石鼎の俳画伸びやか菊日和

畑まで霜踏んでゆく朝かな

色褪せた大蟠螂や道真中

畑電の窓に見てゐる秋夕焼

芋虫を避けながら採る冬菜かな

大根を抜いてみやげに山の寺

冬の田に長き影引く築地松

市街地の庭木啄む冬の鳥

かさこそと落葉を踏んで今日も暮る

塩振つて津田蕪の赤鮮やかに

上島康子

紀英子

熊谷ゆり子

柿の葉の舞ひ散るさまを見つめをり

我が植ゑし白菊一輪仏壇に

霜柱踏んで畠の葱を採る

冬菜煮る香り厨に漂ひて

河原静子

鯉菜に付きし青虫手で潰す

鈴植の冬菜束にし子に送る

初霜を踏んで都心へ子の帰る

里神樂立見の媼子をあやし

高嶋彌代

収穫の冬菜の山と積まれたる

積まれたる冬菜の始末日暮まで

虫食ひの枯葉の赤く染まりたる

霜降りて朝の駆け足ザクザクリ

民

山陰路冬菜畑の整然と

格子戸の脇に咲きたる石路の花

小春日や中洲に鳥の三羽居て

一歩づつ落葉踏む音帰り道

幹

満月を見上げて深く息を吸ふ

スーパーの特売日見て買ふ冬菜

自転車の前籠いつばい冬菜買ふ

みさ子

じやんけんの子の声高き小春かな

公園に落葉踏みしめ笑ひ合ふ

実南天障子に影の映りたる

やす保

秋夕焼ビルより低い観覧車

秋の夜の遅々と進まぬ針仕事

真つ新の霜踏みながら通学す

山崎桂子

冬の夜眠れずラジオ聞いている

阿波久

令和四年十月度作品集より

並矢 私の選んだ十句

山裾をゆけば大路の秋蚊くる	佐保光俊
稲の花駅への道に風吹いて	高尾ひとみ
十六夜の月見る卓に座りけり	あざみ
十三夜ばらばら捲る旅の本	暁子
ピンヒール並ぶウインドウ文化の日	ふじ女
叔母を訪ふ帰りの釣瓶落しかな	松田裕子
月を待つ団子の形整へて	高梨英子
温め酒息子子の帰宅待つてより	撫子
芒原抜けて着きたる登山口	山崎桂子
鰯焼く一人暮らしの煙かな	阿波久

高尾ひとみ 私の選んだ十句

このあたり駅家の跡と柿赤し	佐保光俊
駅降りてバスを待つ間の小望月	村上正人
コスモスを抱ふる人とすれ違ふ	あざみ
母らしき自問自答す秋の富士	綾乃
実石榴や姉は長きに家を空け	暁子
鴉鳴いて鴉も鳴いてタオル干す	知佳子
冬瓜が母の畑にごろごろと	ちどり
七輪で秋刀魚焼きある隣かな	雲雀
秋の夜を寝息聞くまで妹に添ふ	松田裕子
畑に背を伸ばせば鴉の鳴きにけり	森口良樹